
発達理論の学び舎

Back Number: Vol 22

Website: 「[発達理論の学び舎](#)」



目次

- 421.フリジア人
- 422.飛行機雲、書籍、そして三日月
- 423.企業組織における個人の創造性とイノベーション
- 424.創造性の街フローニンゲン
- 425.言葉の召喚作用と知識の体系化
- 426.内なる原形
- 427.理論創出方法について
- 428.11月開講予定の新ゼミナールについて
- 429.変わらぬ休日
- 430.物質的かつプロセス的な知識
- 431.大空を飛ばたく二羽の鳥
- 432.感性の通り道
- 433.変化と不変
- 434.啓蒙書
- 435.研究プロセスにおけるホロン階層について
- 436.有意味と無意味を超えて
- 437.熱感
- 438.多様な文化から
- 439.カート・レヴィンの理論より
- 440.超越的文脈把握力

421. フリジア人

オランダ語のクラス終了後、私の論文アドバイザーを務めてくださるクネン教授と取り交わしたスーパーバイザー契約書を、心理学科の秘書に提出しようと思い、足早に教室を後にしようとした。すると、イタリア人のファブリツィオと中国人のシェンがオランダ国内の電車のチケットについて話し始めたのに気づいた。

京都大学から交換留学で来た日本人の知人から聞いていたように、フェイスブック上で格安の電車チケットが購入できることを聞いており、彼らはそのシステムについて話をしていたのだ。私はまだ一度もこのシステムを利用したことはなく、少し関心があったので彼らの話に加わってから語学センターを後にしようと思った。

何やらフローニンゲンの駅だとこのチケットを文句無しに受け付けてくれるらしいが、駅によっては——特に駅員が年配の場合——この割引チケットを認めてくれないところもあるらしい。その後、シェンの友人の中国人がオランダの片田舎を訪れた時、アジア人という理由で人種差別とも取れるような経験をした、という話を聞いた。

これは先日とある日本人の方から話を聞くまで知らなかったのだが、オランダにはオランダ語ではなく、フリジア語(Frisian)という言語を話す地域があることを知った。フローニンゲンの街から西へ数十キロ行くとフリジア語の地域に入るそう。少し調べると、フリジア語を話すのはフリジア人というオランダ国内の少数民族のようだ。

オランダというところでも英語が通じるようなイメージがあるが、やはり田舎の地域へ行けば行くほど土着意識が強く、英語があまり通じない場合や部外者を奇異の目で見るとあるらしい。フリジア語という言語の特性もそうであるが、フリジア人というのがどのような歴史を持った人種なのかに興味を持ったため、少し調べてみたいと思った。

その後、語学センターを後にすると、ちょうどシェンと進む方角が同じであったため、今学期の残りの期間と来学期の計画について話をしてきた。何やらシェンは、十月の末か十一月の初旬にチェコとハンガリーを旅する計画があるとのことである。興味深かったので、どうしてその二国を選んだのかを聞いてみた。

チェコとハンガリーともに街並みが美しい場所が多く、何よりヨーロッパの中でも物価が格段に安いとのことである。確かにプラハの街並みは綺麗だと聞いたことがあるが、チェコにせよハンガリーにせよ、私にはそれらの中欧諸国に対する情報がほとんどなかった。

シェンの話を聞くにつれ、チェコやハンガリーに対する興味が少しずつ湧いてきた。その後、シェンから、ラトビアとフィンランドを訪れる旅行に誘われた。フィンランドは来年の夏に訪れようと思っていたのだが、ラトビアとはまた珍しい国に着目したものだった。

シェン曰く、現在履修しているコースの都合上、彼は今、ラトビア語の学習も進めているそうだ。シェンの話を聞きながら、バルト三国の一つラトビアにも少し関心を持ったが、現在の仕事量を考えると、長期休暇以外で国外に旅行に出かけるのは厳しいものがある。

だが間違いなく、今の私は日々の生活の中に少しばかり変化を加えようとしているため、三日間か四日間ぐらいであればヨーロッパのどこかの国を訪れるのも悪くないと思った。それぐらい、今の自分は外的な力による変化を求めているようなのだ。

朗報としては、明日ついに日本から船便で送った書籍群が自宅に届けられる。論文や書籍が新たに自分の書齋に加わることは、自分にとっては貴重な外的変化である。

422. 飛行機雲、書籍、そして三日月

エメラルドブルーの夕方の空に、流れ星のような飛行機雲が流れていく。私は肩の力を抜いて、窓からぼんやりと、夕日に照らされた飛行機雲を眺めていた。晴れ渡ったフローニンゲンの夕暮れの空に、その飛行機雲は流れ星のような輝きを放ちながら流れていた。

その美しさに時間を忘れ、私はただこの飛行機雲だけを見つめていた。飛行機雲が流れ星のように見えたのは、生まれて初めてのことだった。また、その流れ星のような飛行機雲は、目的地に向かうにつれて、線香花火のようにか小さく消えていった。

流れ星のような美しさを放っていた状態から、線香花火の灯火のような状態になるまで、時間としてわずか数分だったように思う。この数分の中に、変化の最中に存在する力強い美と、変化の終焉にある繊細な美の両方を見たような気がした。

今日はついに、日本から船便で送った大量の書籍と論文がフローニンゲンの自宅に到着した。国をまたぐ引っ越しでは、毎回ヤマト運輸さんにお世話になっている。海外の引っ越し業者や国内の他の引っ越し業者に比べて、ヤマト運輸さんのサービスは非常に優れていると思う。

それは価格面のみならず、搬送や手続きの迅速さを含めて、非常に優れたサービスを提供してくれるのだ。そのため、いつも有り難く思っている。今回は、わざわざアムステルダムから運搬車を数時間走らせてもらい、荷物を全て無事に届けてもらった。

担当してくださった方曰く、ダンボール一箱あたりの重量が規定の重さをオーバーしており、欧州の業者では搬送を拒否するとのことであった。届けられたダンボールを部屋まで運ぶ際に、本当に腰を痛めかねないと思うぐらいの重さであり、自分でも笑いが出てきた。体を壊さないように、その場でダンボールを開け、重たい書籍を取り出して、ダンボールを軽くした上で自室まで運んで行った。

今の自宅にはエレベーターがなく、螺旋階段があるだけなので、こうした重たい荷物を運ぶのは一苦勞であった。今日のフローニンゲンは、もはや涼しいという域を超えて寒いという域に入っていたのだが、ダンボールの搬入によって相当な汗をかいた。数年後、オランダから他の国へ引っ越しをする際は、ダンボールの数を増やし、もう少し搬出・搬入が楽になるようにしたいと思う。

九箱のダンボールを一気に開封し、備え付けの五つの本棚にカテゴリーごとに書籍を並べていった。自分の愛読書が届いた瞬間と、それを本棚に並べている時間は、嬉々とした感情に包まれたものだった。背表紙を眺めて中身を思い出しながら、次々と書籍を本棚に並べていった。

それぞれの書籍の内容を一瞬にして把握し、それらを自分が思い描く所定の位置に並べていく作業は、どこかジグソーパズルを組み立てているような感覚であった。実際に、書籍がカテゴリーごとにどんどん並ぶに連れて、私の頭の中では間違いなく、大きな活字体の構築物が形成されていたのだ。

カテゴリーごとに複数の概念的ゲシュタルトが形成され、それらのゲシュタルトがさらに大きな一つの概念的ゲシュタルトに変貌していく様子が手に取るようにわかった。無事にジグソーパズルが完成し、一つの統括的ゲシュタルトが形成された瞬間は実に爽快な気持ちになった。

作業後の本棚は、本棚としての役割を果たし始めたと言わんばかりに輝いており、書齋の眺めが壮観なものに変わった。フローニンゲン到着後二ヶ月経った今日から、本腰を入れて文献調査を毎日行うことのできる環境になったと言える。これまでの二ヶ月間は試運転の状態であったため、自分の仕事に関してもはや遠慮することなど一切ないという気持ちに変わった。

自分の探究活動が仮にどこかで行き詰まったとしても、私を救い出してくれる書籍が自分の周りに数多く存在してくれることは、限りなく心強い。何よりも心強い。

作業が全て終わったところで一息ついた。再び窓越しに外の景色を眺めると、オレンジ色の三日月が顔を覗かせていた。月の満ち欠けのリズムは、自分の内側のリズムと疑いようもなく繋がっていることが強く実感されたところで私は就寝に向かった。2016/10/4

423.企業組織における個人の創造性とイノベーション

普段であれば、その日の出来事や授業の内容をその日のうちに文章として書き留めているのであるが、昨日は例外であった。日本から届いたダンボールの開封と書籍の陳列に時間を取り、昨日の授業の振り返りをその日中に行うことができなかった。

こうした振り返りをその日のうちに行い、しかも文章の形に留めておかないと、就寝に向かう最中の意識の中で、その日の記憶を遡るような運動が勃発し始める。この運動が始まると、時に長時間にわたって記憶の整理がなされるため、速やかに入眠することができなくなってしまう。それを防ぐためにも、やはりその日のうちに、一日の出来事を通じて湧き上がった思考や感情を文章の形で梱包しておく必要があると思った。

昨日は、「タレントディベロップメントと創造性の発達」というコースの第四回目のクラスがあった。今回のクラスもまた、自分の関心に火を付けるような内容であった。当初の予定では、今回のクラスは「教育における才能と創造性の評価と支援」をテーマとするものであったが、第五回目のクラスと内容が入れ替わることになった。

そのため、今日はエリック・リーツシエル教授の「企業組織における個人の創造性とイノベーション」という講義が行われた。リーツシエル教授は長きにわたって、産業組織心理学の観点から、企業組織における個人の創造性とイノベーション創出について探究をしている研究者である。

個人の知性や能力の発達のみならず、組織の発達、ひいては組織においていかにイノベーションを創出していくかについて関心を持っている私にとって、今日の授業はこれまで以上に得るものが多かった。リーツシエル教授は来学期に「個人の創造性と組織におけるイノベーション」というコースを開講する予定であり、コンテンツのみならず、リーツシエル教授の人柄にも惹かれるものがあったため、そのコースは必ず履修しようと思う。

それでは、今日のクラスの内容を元に、リーツシエル教授であれば最終試験にどのような設問を出してくるかを考えてみたい。今日のクラスの内容は盛り沢山であるため、出題に迷うが、例えば「個人の創造性の開発から組織としてイノベーションを創出するまでのプロセスを述べ、プロセスを説明する中で、先行研究に基づいた実務的な実効案を述べよ」という設問を設定してみたい。

組織がイノベーションを創出するためには、何よりもまず、組織の構成員となる個人が創造性を発揮できるようにしていく必要がある。その際に、個人が単独で創造性を発揮できる状態にしていくというプロセスと、個人がチームとして創造性を発揮できる状態にしていくという二つのプロセスがある。

SomechとDrach-Zahavy(2013)が指摘するように、個人の創造性は開発可能であり、それは具体的なタスクやプロジェクトに従事する中で意識的に高めていくことが可能なのである。ただし、ここで重要になってくるのは、創造性を意識的に高めていこうとする姿勢であり、そうした意識を常に高く保つためには、一人でタスクやプロジェクトを黙々と遂行しているだけでは非常に難しい。

現在、私は学術論文を執筆する際に、スーパーバイザーに就いてもらっており、自分の研究テーマに対して創造性を発揮できるような支援を常に受けている。実際に、スーパーバイザーとの対話のおかげで、研究に関するアイデアが泉のように湧き上がることが多々ある。

また、研究上の困難に直面しても、スーパーバイザーがメンターとしての役割も果たしているため、創造的なアイデアの創出から具現化のプロセスまで包括的な支援を受けていると思う。このように、

個人が創造的なアイデアを創出し、それを具現化させていくまでの道のりで、スーパーバイザーやメンター(あるいはコーチ)のような存在は非常に重要だと思う。

次に、個人がチームとして創造性を発揮していくためには、チームメンバーの構成が鍵を握る。Jackson(1992)の先行研究に基づくと、特にチームの「機能的異質性(functional heterogeneity)」を担保することが重要になる。「機能的異質性」とは簡単に述べると、職種に関する多様性である。理想的には、職種や部署が全く異なるメンバーを集めて一つのチームを形成することが望ましい。

仮にこうした多様性に溢れるチームを形成することが難しければ、少なくとも職務年数や過去の職務経験の内容に偏りのないチーム編成をすることが求められる。実際に幾つかの先行研究を見ると、個人の創造性を開発し、チームの機能的異質性を担保すればするほど、組織の中で創造性に溢れるアイデアが創出される傾向にあるのだ。

しかしながら、いかに個人の創造的な能力を高め、組織の機能的異質性を担保したからといって、実際のイノベーションの創出に至るまでには、もう一つ大きな壁があるのだ。それは何かというと、創造性に溢れたアイデアを実際のサービスや製品として具現化させることである。

そして、こうした具現化の鍵を握るのが、組織の中に、イノベーションに対する集合的な動機付け、つまり文化を根付かせることであり、そうした文化の中で、実際にチームとして共同作業や共同プロジェクトを遂行していくように促すことである。

簡単に述べると、個人の創造的な能力を高め、組織の機能的異質性を担保することは、「創造的なアイデアの創出(idea generation)」に関わることである。一方、組織の中にイノベーションに対する集合的な動機付けを含めた文化を根付かせることや、チームとして実際の共同作業に従事させることは「創造的なアイデアの実行(idea implementation)」に関わることなのである。

両者ともに不可欠なものであり、どちらかが欠けている場合、組織の中でイノベーションが起こることは極めて難しくなってしまうのだ。個人の創造的な能力を高めるためには、上記で紹介したように、スーパーバイザーやメンター(あるいはコーチ)を活用することが一案としてあり、組織の機能的異質性の担保や創造的なアイデアの実行に関わるフェーズでは、外部の専門家やコンサルタントを活用することが一案として挙げられる。

とかく日本では「産学連携」という言葉を強調しないと産業界と学术界が共同できないような状態にあるように思う。また、学術的な専門家は、実務的実行能力に欠けている場合があり、逆に企業組織は、外部専門家を有効活用するような経験が乏しいように思える場合が多々ある。集合規模で創造性を発揮していくのは一筋縄ではいかないものであり、必ずそこでは様々な関係当事者の共同作業が求められるように思う。

話題が脱線したため元に戻すと、組織としてイノベーションを創出していくためには、「創造的なアイデアの創出フェーズ」と「創造的なアイデアの実行フェーズ」の中で、個人の創造的能力に関する発達を支援すると共に、イノベーションに関する集合的な動機付けやチームとして具体的な共同作業を行っていくことが大切になる。

SomechとDrach-Zahavyの興味深い研究結果として、特にイノベーションに関する集合的な動機付けがなければ、いかに個人の創造的能力を高め、組織の機能的異質性を担保したとしても、アイデアの実行フェーズでそれほど効力を発揮しないことが明らかになっている。そのため、集合的な動機付けを促すワークショップやグループ学習などがここで重要な役割を果たすことになるかもしれない。

次回のクラスは、「教育における才能と創造性の評価と支援」というテーマであり、引き続き自分の関心事項と強く合致した内容になるため、今から非常に楽しみである。

424. 創造性の街フローニンゲン

起床直後、両腕に激しい筋肉痛があることに気づいた。それもそのはずで、昨日は大量の書籍と論文が梱包されたダンボールを持ち運びしていたからである。このように普段行わないような力仕事をしてみると、自分の身体のどこが鍛えられており、どこが鍛えられていないのかが一目瞭然である。

普段から鍛錬をしている腹筋や背筋に関しては、筋肉痛のようなものは何も感じられないのだが、上腕二頭筋と前腕部分に激しい筋肉痛が残っている。こうした筋肉痛以外にも、昨日の作業が私に変化をもたらしたことがあった。やはり書籍が到着してみると、自分の内側から、より献身的に仕事に取り組んでいこうという意欲が湧き上がっているのだ。

フローニンゲンの朝はすでに寒くなっているが、起床直後から、その日一日の仕事に取り組むことを大いに楽しみにしている自分がいることに気づく。書籍や論文が到着したことによって、こうした心境の変化がもたらされるとはあまり想定していなかったため、幅と深さを伴った探究活動を一段と推し進めていく上でこうした変化は有り難いことであった。

現在私が住んでいるフローニンゲンという街は、「創造性の街(City of Creativity)」と謳っている。街と産学が見事に連携している様子を確認に見て取ることができるが、具体的にどのような形でこの街が創造性を発揮しているのか定かではなかった、というのが正直なところである。

しかしながら、街中を歩いたり走ったりする中で、自分のこれまでの認識の枠組みを客観的に捉え直してみると、これまで気づけなかったような創造性の発露をこの街に見て取ることができる。これまでの私は、経済的・経営的な観点に縛られて、この街の創造性について考えていたようであった。

ここでその他の視点、例えば教育的な観点、街の運営に関する政策的・政治的観点などを考慮に入れてみると、この街は確かに斬新かつ人々が価値を見出せるような制度・雰囲気・設備などを持っているように思う。その中でも、教育セクターの果たす役割は大きく、街全体を挙げて教育都市としての地位を築き上げており、世界各国から多くの優秀な研究者や学生を招聘し、それが地域の経済や安全性を高めることにもつながっているように思う。

この街が発揮しているそうした創造性は目には見えにくいものなのだが、そこで生活をしている人々には必ず感じられていることなのだと思う。私はこれまで色々な場所で生活してきたが、フローニンゲンという街はこれまで住んだ街の中では、自分にとって総合的に一番暮らしやすい場所だと思う。

そうした暮らしやすさを支えていたのが、街と産学の連携が生み出す目には見えない創造性のおかげだったのだ、と最近気づくようになった。このようにして生まれた創造性は、この街の時間の流れ方を変えてしまうような力を持ち合わせ、本質的に創造的であるこのリアリティの流れとも見事な調和を成しているように思えるのだ。

集合的に生み出された創造性は、人々の生のあり方を規定してしまうような途轍もない力を内包しているのだと改めて思わされた。

425. 言葉の召喚作用と知識の体系化

ここ最近の私は、言葉が持つ召喚作用、すなわち何かを喚起するような力に沿って自己や対象を描写するようになってきているように思う。内側や外側の現象を何か捉えたと思ったら、それを言葉にしてみる。すると興味深いことに、言葉の喚起作用によって、当初予定していなかったものまで立ち現われ、それらをまた観察対象として言葉にしようとする連続的なサイクルが生じるのだ。

このサイクルは理論的には無限に続くものだが、実際的には当人のその時の状態と呼応するように、あるところで突如としてサイクルが収束に向かう。こうしたサイクルが静かに終りを告げると、その痕跡には変化の軌跡と自己の前進を発見することができる。

言葉を紡ぎ出し、その言葉が新たな現象を呼び起こす時、自己は新たな言葉に対応して自ら変化を遂げる。自己と言葉はまさに密接不可分な関係にあり、新たな言葉が生み出されると、自己が新たなものに変貌するというのもうなづける。

言葉が新たな言葉を生み、自己が新たな自己を生み出すという変化の軌跡と自己の前進がそこにあるのだ。私たちの言葉には、これまでにない新たな言葉と新たな自己を生み出すような召喚力が内在的に備わっているというのは実に不思議なことである。

また、こうしたサイクルを日々意識的に生み出し、毎日つぶさに観察をしてみると、小さなサイクルと大きなサイクルがあることに気づく。小さなサイクルは、発達科学の世界で言うところのマイクロな発達である。ここでは、既存の言葉は確かに新たな言葉を生み出し、自己に新たな側面を付け加えるが、それらのどちらも既存のレベル構造の中で起こる現象である。

つまり、そこでは、既存の言葉を生み出していた階層と同じところから新たな言葉を創出し、同じ階層内で自己に新たな特質が追加されることになるのだ。一方、より大きなサイクルは、発達科学の世界ではマクロな発達と呼ばれるような現象である。ここでは、既存のレベル構造とはまるっきり異なる構造が立ち現われ、その構造から新たな言葉を生み出し、自己に新たな側面を追加していくのである。

個人的には、小さなサイクルで生じる現象はよほど目を凝らしていないと気づきにくいものだと思う。一方、大きなサイクルで生じる変化も、実際のところは変化の只中ではそれに気づくことは難しい。むしろ、大きなサイクルが収束し、その結果を後々振り返ってみると、言葉を生み出す構造と自己が大いなる飛躍を遂げていたことに後から気づくような類いの現象である。

言葉の召喚作用という性質は、ダイナミックシステム理論で言うところの自己創出に他ならないことに気づかされる。これは以前にも取り上げたが、やはり言葉が新たな言葉を生み出し、それに伴って自己が新たな自己を生み出していくのである。

こうした自己創出的なシステム特性は、知識の形成過程においても当てはまるのではないかと思うに至った。私たちの知識は言葉と経験と結びついているため、言葉と自己が自己創出的な特徴を持って自己展開していくのであれば、知識もそのような形で自己展開し、徐々に大きな構築物を築き上げていくというのも納得がいく。

ただし経験上、言葉にせよ自己にせよ、そして知識にせよ、自己創出的な特性があるからといって、何もせずして構造的な大きな変化は生まれないということもわかっている。意識的な観察と鍛錬なくしては、同じ構造内での自己創出ループに絡めとられるだけであり、一段上の構造内で自己創出を行うことなどできないだろう。

今の私は、自分の知識体系を一段上の階層内で構築していく必要性に迫られており、見えないところで大きな負荷がかかっていることがわかる。ここ何日間も一般システム理論やダイナミックシステム理論に関する探究作業を続けているのだが、得られた知識を同じ階層内でしか活用することができていないことが手に取るようにわかる。

それと同時に、次の階層にたどり着くためには、この階層内を関連する膨大な知識で埋め尽くさなければならないことも直感的に把握している。知識の体系が上位構造のものに変容を遂げるためには、その構造ではもはや処理しきれないほどの大量の知識が集積され、集積された知識が複雑なネットワークとして結び合わされることが不可避に要求される。

今の私は、複雑なネットワークを構築するためのノード(結節点)となる膨大な知識が必要であり、それらを組み合わせて発動させるような鍛錬も同時に求められている。こうした新たな知識の体系化がなされた時、私の脳内も同様の変化を遂げることになるだろう。

426.内なる原形

今から一ヶ月か二ヶ月前に経験したような爆発が、自分の内側で再び起こりそうな気配を感じている。今の自分には、特定領域の探究に自己を向かわせる差し迫る何かがあるにあり、それは脅迫的なものではなく衝動的な探究衝動である。

現在直面している壁を乗り越えるには、ここでもう一度、自分の内側で爆発が起こる必要があるのだと切に思う。当初の予想以上に、システム科学と複雑性科学の射程は広く、その深度は実に深い。私はこれらの領域を探究しているというよりも、それらの領域に狩猟されているのではないかと思うことすらある。

あるいは、それらの世界には今の私では足を踏み入れることのできない領域が広大に広がっており、私はその領域へ入るための門前で旋回しているような感覚なのだ。この城門を突破するためには、内側での爆発が必要となるようなのだ。

これは知識領域に限らず、どんな技術領域にも当てはまることだが、その領域の次なる深みに到達するには、精神的にも肉体的にも乗り越えていかなければならない大きな壁が必ず立ちはだかる。こうした壁を乗り越えていくための自己の炸裂とエネルギーの噴出が自分の内側で起こる日は近いように思う。

ただし、爆発を爆発として終わらせず、ある種の統一体を自分の中で保持しておくことが重要になるだろう。つまり、灼熱の塊を内側に保持した新たな統一体を自分の中で形成し、その統一体を通じて仕事を進めていくのである。

幼少期の頃、得体の知れない熱に浮かされて、夢中で日記を書いていたことや、特定の事物に強い関心を持ってただひたすらにそれを探究していたあの頃の状態は、ここで言う統一体の原形を成すものなのかもしれない。そうした原形は、紛れもなく幼少期の頃にすでに形成されていたもの

であることに気づく。その原形は、失われることなく私の中枢に核として存在しており、内面の成熟に合わせてその原形も独自の発達過程を見せるのだ。

今日も朝から仕事が順調に進んだ。論文用のデータの翻訳作業は量的に多いが、自分が設定したペースで着実に作業を進めていくことができている。

また、クネン教授から課題として提出された「定性的研究手法における理論構築プロセス」に関する探究も少しずつだが着実に進んでいる。このように私の仕事を着実に推し進めてくれる媒体が、まさに自分の核にある原形なのだと思う。

427.理論創出方法について

今日は大学図書館からの帰り道、先日発見したチーズ屋に立ち寄り、ナッツ類とチーズを購入した。ここはチーズ専門店であるため、ここのチーズはやはりスーパーで購入するものよりも味がいい。チーズ屋からの帰り道、科学的な理論を創出する方法についてあれこれ考えていた。

今回の研究論文では、主に二つのアプローチで理論を創出していこうと思っている。まず一つ目は、これまでの実務経験や既存の知識を駆使して、ある意味直感的に仮説を生み出し、その仮説をもとに理論モデルを作るという方法である。

これは演繹的な方法でも帰納的な方法でもなく、どちらかというと、チャールズ・サンダース・パーズが考案したアブダクション的(仮説推論的)な方法によって理論モデルを作っていくというアプローチである。今回の私の論文は、成人のオンライン学習に焦点を当て、各受講者の動的に変動する多様な学習プロセスを踏まえて、いかに効果的な教育実践を行うことができるのかを探究するものである。

これまで数年間にわたって、オンラインゼミナールを開講してきた経験から、クラスの中でどのようなことが起こっており、ファシリテーターや講師としてどのような介入やアクティビティを行えば、学習を促すダイナミズムがクラス内で生まれるのかを直感的に掴みつつある。

今回は、こうした直感的に掴みつつある持論のようなものを仮説として設定し、そこから理論モデルを作っていこうと思っている。これが一つ目のアプローチである。

もう一つは、知識や経験をもとに仮説推論的に理論を創出していくのではなく、データから理論モデルを創出していく方法である。

これは私がマサチューセッツ州のレクティカに在籍していた時に目撃していた理論創出方法である。今回の私の研究で言うと、クラス内でのやり取りを定性的なデータとして文字に起こし、そこから自分を含めて参加者の発言内容を概念化しつつカテゴリーを見出していき、カテゴリー間の関係性をもとに理論モデルを形成していくアプローチである。

こちらは現実のデータから類似点を発見し、それらをまとめ上げていく作業を経て理論を生み出していくため、帰納法的な理論創出プロセスだと言えそうだ。帰納法では、現実の観察データをまとめ上げていくときに「納得感」が重要であると言われるが、この納得感は研究者の経験や知識に大きく左右されるようなものなのかもしれない。

この二つ目のアプローチでは、納得感を常に保持することによって観察データから理論を徐々に積み立てていくことになる。一方、前者のアプローチでは、納得感に基づいて理論を積み重ねていくというよりも、納得感を一つ飛びにした直感的確からしさに基づいて理論モデルを生み出していくことになるのだろう。

前者のアプローチに関しては、パースの全集 “The essential Peirce: Selected philosophical writings Volume 1 & 2 (1992; 1998) “を参考にし、後者に関しては、定性的研究手法に関する手持ちの専門書を引き続き参考にしていこうと思う。

前回のクネン教授とのミーティングで指摘があったように、理論モデルを構築することに終わりではなく、研究者として活動が続けていく間中、自分の理論モデルというのは常に進化していくものなのだ。今回の研究論文では、自分の関心事項に照らし合わせて、暫定的に今の自分で考えられうる最良の理論モデルを構築していきたいと思う。

そして今後の論文で、今回の理論モデルをベースに、あるいは今回の研究で得られた発見事項をベースに、新しい理論モデルを構築していくという仕事を行なっていきたい。理論モデルを構築することに終わりはないというのは、どこか自己や世界を探究することに終わりがなくと似ている。

とりあえず今回の研究という具体的なプロジェクトを通じて、成人のオンライン学習に関する自分なりの理論モデルを構築することに加え、理論を創出する方法に対する持論を形成することを絶えず意識しておきたい。

428. 11月開講予定の新ゼミナールについて

今日の午前中は、まず論文用のデータの翻訳作業を引き続き進めていた。ようやく半分ほどの翻訳作業が本日をもって終了した。その後、定性的研究手法である「グラウンデッド・セオリー」に関する参考文献を読み進めていた。

体系化された方法論を使って理論を生み出すことはこれまでそれほどなく、こうした参考文献を読むにつけ、理論を創出する方法そのものに関しても、様々な研究やアプローチが存在することがわかる。理論を創出する方法は、知識体系を構築していく方法とも重なる部分があると思っており、このテーマに関しても、研究という具体的な作業を進める中でより理解を深めていきたいと思う。

今日は午後から気分転換を兼ねて、街の中心部にある大学図書館で仕事をしていた。一年振りに新しいゼミナールをこの11月に開講しようと思っており、その教材を作成していたのである。全七回にわたる今回のオンラインゼミナールは、卓越性研究の最前線の動向に基づき、卓越性に関する様々な理論や概念を紹介していくことを目的にしている。

具体的には、私たちの知性や能力はどのようにして卓越の境地に至るのかというプロセスとメカニズムについて、発達理論の観点からだけでなく、他の科学領域の観点から学んでいくことを目的にしている。卓越性に関する様々な実証研究を紹介しながら、人や組織の発達について学びを深めていくことを目指しており、これまでのゼミナールで扱ってこなかった理論や概念を取り上げていこうと思う。

今回のゼミナールはこれまでのゼミナールと少し異なり、受講生に習得していただきたい理論や概念—思考や実践を深める素材—をきちんと伝えるために、各回20-30スライドほどの講義を計画している。やはり、実践の密度を濃くしていくためには、それ相応の知識量が不可欠だと考えている。

実際に私も、人間の知性や能力の発達に関する多様な理論や概念を学ぶにつれ、それらを素材として、自分の思考や実践が少しずつ深まっていくのを実感している。知識というのは不思議な力を持っており、その知識があることによってしか見えない現象が存在しており——同時に盲点も生み出すが——、知識は実践を深めていく潤滑油のような役割を担っていると考えている。

つまり、人間の知性や能力の発達に関する知識が豊富になればなるほど、それらを組み合わせることによって、自分や他者の発達に対してより適切な関与と献身を可能にすると思うのだ。今回は発達理論の枠組みだけでは見えてこない現象にも光を当てるため、様々な科学領域から人間の知性や発達に関する知識を習得していくことを目指している。

クラスの中で、学術的な概念や理論を元にそれらをどのように実践の場で活用していくのかについてもディスカッションをしていくつもりである。卓越性に関するゼミナールはおそらく今回が最初で最後であるため、受講生とのやり取りを含め、11月からのゼミナールが非常に楽しみである。

429. 変わらぬ休日

秋も深まるフローニンゲンの土曜日。今朝は朝一番に、最終試験がそろそろ近づいてきているオランダ語コースの復習を少しばかり行った。その後、「自国の食べ物の紹介」についてオランダ語で説明文を書き上げるライティングの課題があることに気づいた。

ライティングはリスニングやスピーキングに比べて、内容を考える時間的余裕があるため、それがオランダ語であっても、私はライティングの課題を好む傾向にあるのだ。辞書を引きながら、ゆっくりと自分が表現したいことを文字で書き表していくことに独特の喜びを感じるのである。

今日は先週の復習で手一杯であったため、自国の食べ物を紹介するというライティングの課題は、明日の朝に取り掛かろうと思う。

次に取り掛かっていた仕事は、論文の提案書を洗練させることであった。クネン先生から助言と指摘をもらった箇所を中心に、提案書に追加・修正を加えていた。クネン先生からの指導によって、提案書の中身がより充実したものになっていくことがはっきりと見て取れる。

改めてスーパーバイザーという指導者の果たす役割は大きいと思った。これまで第一線の研究者として数々の論文を執筆しているクネン先生のアドバイスはいつもの確である。これまでの自分が置かれていた環境などを踏まえると、このような優れた研究者から毎週直に指導を受けることができるというのは、考えてもみなかったことである。

実のところ、研究の進捗状況をほぼ毎週報告する必要などあるのかどうか最初は疑問に思っていたのだが、クネン先生との毎回のミーティングによって必ず得るものが何かしら存在するのである。また、ほぼ毎週ミーティングが設定されていることによって、休むことなく一定のペースで研究を進めていくことができるのだ。

学術研究は論文という成果物を生み出すことを主たる目的としているが、途中で無駄な休みを入れてしまうと、再び研究を開始する時に多大なエネルギーを必要としてしまう。これは研究に限らずどんな分野の実践にも当てはまるだろう。

とにかく途中で無駄に中断を設けず、一定のペースで進み続けることが何より重要であり、一度作ったペースに身を委ねて仕事を進めていると、いつの間にか、当初予定していなかった遙か彼方に自分が辿り着いたことを後から知るのである。継続が持つ力というのは往々にしてそういうものだろう。今の私は、朝の一番集中できる時間帯に、研究論文に関する仕事をするようにしている。

残りの午前中は、専門書や論文を読むことなく、11月に開講予定のオンラインゼミナールの教材を作成していた。結局のところ、説明資料を作ろうとすると、あれこれと参考文献を見返す必要があるので、幾つかの専門書や論文に目を通していったことになる。

特に、今回のゼミナールでは科学的な実証結果を紹介する箇所が幾つもあり、数字や結果に関して記憶が曖昧なところはすべて原典に立ち返る必要があった。毎回資料を作りながら経験するのは、こうした作業を経ることによって、これまで見落としていた発見事項やこれまで誤解していた箇所などに気づくということである。

そして、いざ資料を自分で言葉に出してみると、意外とうまく説明できない箇所があることに気付くのだ。こうした箇所は、往々にして自分の理解が不十分であることを示しており、そうした箇所を中心に再び参考文献に立ち戻るといったサイクルを繰り返している。

教材を作るという作業が自分の学習に直接的に繋がっているというのは実に面白いことである。今日は卓越性研究の歴史と最先端研究に関する資料を作り終えたので、明日は卓越性と感情やマインドセットの関係に関する資料を作成しようと思う。

430. 物質的かつプロセス的な知識

秋の安定期に入ったかのようなフローニンゲンの日曜日の朝。窓の外では、未だ青さを保つ木々が緩やかな風に揺れている。今日の空は、朝から薄い雲に覆われている。あいにく今日は、午後から雨が少し降るらしい。

今日は、まさに書齋にこもって仕事を進めるにふさわしい日になるだろう。今朝は連続した二つの奇妙な夢を見たところで目が覚めた。どうやら十時間ぐらい寝ていたようである。そういえば、このような大量の睡眠をとることが周期的にやって来ることにふと気づいた。

それは一ヶ月に一度ぐらいのペースであろうか。確かに昨日は、高い集中力を持って自分が予定していた仕事をすべて終わらせることができた。昨日においていつもと違うことを何かしたかという、久しぶりに大量のPPTスライドを作成したことと文章をそれほど書けなかったことだろうか。

この二つが昨夜の睡眠時間にどれほどの影響を与えているのかは定かでない。昨日の二つの要因が引き金になったというよりも、やはり様々なものが私の中に蓄積した結果として、昨夜のように長い睡眠が必要となったのかもしれない。

いずれにせよ、一対一の線形的な対応関係ではなく、無数の要素が絡み合う非線形的な関係がそこにあるような気がした。いつもより二時間遅い起床だったが、そこは柔軟に対応し、毎朝の習慣としている実践を各々少し短めの時間で行うことにして、いつも通りのリズムを作り出した。

先ほどの睡眠の件しかり、ここ最近テーマとしていた知識体系の構築化の件しかり、どちらにおいても非線形的な複雑な関係性が鍵を握るのかもしれないと思った。するとふと、私たちの知識を物質とみなすのかプロセスとみなすのか、あるいはその両者の総合体とみなすのか、という三つの立場があることを思い出した。

確かに私たちの知識は、記憶として脳内のどこかに格納される物質のようなものである。正確には脳のどこかに格納されているというよりも、シナプスの連鎖とニューロンの発火によって記憶が立ち現れるようなものなのかもしれない。

いずれにせよ、脳という物理的な物質が関与しているため、確かに私たちの知識には物質的な側面があるだろう。しかしながら、仮に知識が物質として脳に格納されているのであれば、これほどまでに記憶が抜け漏れてしまったり、記憶違いをしてしまうような現象に判然としないものを感じるのだ。

私たちの脳はそれほど性能の悪いものなのだろうか。仮に認知科学者のように、私たちの脳を「機械」というメタファーで捉えるならば、脳が容易に記憶の抜け漏れを生み出すことを考えると、私たちは相当に低い性能の機械を持っていると言わざるをえない気がする。

また、知識が物質的な側面を持っているのであれば、これほどまでに環境や文脈に応じて形を変えることにも釈然としない。これほどまでに姿を自由自在に変えられる物質を私は他に知らないため、それを物質と呼ぶことに躊躇するのだ。

このようなことに思いを巡らせてみたとき、ダイナミックシステム理論に関して「ブルーミントン学派」という思想潮流を打ち立てたエスター・セレンとリンダ・スミスが、知識を単なる物質として解釈することにあれほど強い批判を加えていた理由がわかるような気がした。

もちろん私たちの知識は、客観的な物質である脳と密接に関係しているため、物質的な側面もあるだろう。しかしながら、知識というものがそもそも思考や感情と密接に関わる主観的な事象であるがゆえに、知識を単なる物質とみなすことには限界があるのだ。

セレンとスミスのダイナミックシステム理論に基づけば、私たちの知識はプロセスとしての側面も持っているのだ。私たちは現実世界の動的に変化する多様な環境や文脈の中に置かれることによって、知識がリアルタイムに再編成される形で立ち現れ、そしてそれが活用されるのである。

また、知識は時や状況の変化に応じて、ダイナミックに姿を変えていくという特徴を持っている。こうした特徴の中でも私が特に着目しているのは、知識が組み合わせたり、質的に異なったものに変容していくプロセスとメカニズムに他ならないことに改めて気づいた。知識を単なる固定的な物質ではなく、物質的な側面を持った動的に進化するプロセスとして捉えることに何かヒントがありそうだ。2016/10/9

431.大空を羽ばたく二羽の鳥

自分の中の全ての事柄が、落ち着いた流れの中で進行しているのを感じる。八月の中旬に欧州小旅行に出かけたことがふと思い出され、あの時の私は、そこでの体験を消化するのに相当な時間がかかると思っていた。

その時の私は、旅で得られた重厚的な感覚質に飲み込まれそうになっていたことは間違いない。しかしながら今日、バランスボールに乗りながら自室の天井を眺めた時に、あの時の密度の濃い感覚質はもはや自分の中に存在していないのではないか、と思わされたのだ。

あの感覚質は自分の中で間違いなく消化されたのか、それとも未だ自分の中のどこかに潜んでおり、発現の好機を伺っているのだろうか。いずれにせよ、今の自分は安定的な状態にあると言える。全てが静かに流れ、全てが静かに去っていくのだ。

自分がやると決めた仕事を毎日同じペースで淡々とやり続けていくことで毎日が過ぎていく。そこには目を見張るような変化もなく、静かで安定的な時空の中で全てのことが進んでいくのだ。

食卓の窓の向こう側に、二羽の鳥が大空を羽ばたいているのが見えた。少しばかりそれらの鳥を観察していると、彼らの動きが実に変化の富むものであることに気づいた。今日のフローニンゲンの朝はほとんど風がない。

風がないにも関わらず、それらの鳥は一直線に進んでいくのではなく、微妙に高さや速度を変えながら空を羽ばたいていることに気づいたのだ。私は大空という一つのキャンバスにデカルト座標を描いてみた。その座標空間の中に鳥たちを位置付けてみる。

今この瞬間の彼らの位置を設定し、次の瞬間に移動すべき地点はどこだろう、と私が予想しても、彼らは私の予想通りには動いてくれない。実に予測のつかない形で、多様な軌跡を描きながら彼らは空を飛んでいるのである。

ここからまた色々なことを考えさせられた。無風の空には、私の目には見えないような乱気流が存在しているのかもしれない。安定的に見える空の中には、実は複雑かつ動的なうねりが存在しているのかもしれないと思わされた。

今私の目の前を飛び去っていった鳥たちは、こうした乱気流の中で懸命に羽ばたいていたのかもしれない。そして私が重要だと思ったのは、大空の中に生じている目には見えない乱気流の存在だけでなく、二羽の鳥たちそのものが気流を生み出しているということであった。

鳥たちが羽ばたくことによって、彼ら自身が気流の生成に一役買っているのだ。そんな鳥たちが私の食卓の窓に近づいてくる。彼らの表情は実に平然とした清々しいものであった。安定的に見える大空の中に、実は不安定なうねりが存在しており、そうした変化に富む空をそれらの鳥たちは不規則に動いていたにも関わらず、彼らの表情は極めて落ち着いていた。

そうこうしていると、二羽の鳥は、未だ青みがかった街路樹の上に静かにとまった。そして、二羽の鳥が優しいメロディーを奏で始めたのだ。彼らの鳴き声の意味を完全に理解することは残念ながら私にはできないのだが、彼らが充実した対話をしているということは疑いようもなくわかった。

木にとまり、対話をし、休む二羽の鳥。彼らの対話の一部始終を見届けると、二羽の鳥たちは再びどこかへ羽ばたいていった。彼らの羽ばたく姿やそれが意味する内容は、今日初めて彼らに出会った時とはもはやまるっきり異なるものになっていた。

安定期のように見える不安定期や、不安定期のように見える安定期が存在していたとしても、それは一つのサイクルとして永遠に続いていくものなのである。今朝感じていた安定期のように見える不安定期が終わり、不安定期に見える安定期がやってくる日は近い。

そうした最中にあっても継続的に活動が続けることが、動的な存在として生きるものたちの宿命なのだろう。

432.感性の通り道

希望という言葉や絶望という言葉が、もはや自分にとってあまり重みを持たないものになっていることに気づいた。これは自分が真の希望を持てていないことの表れなのか、真の絶望を経験していないことの表れなのだろうか。

あるいは、希望や絶望という言葉を超えた意味が自分の中で芽生えつつあることの表れなのだろうか。それらのいずれにせよ、希望や絶望という言葉をやさしく口に出すようなことができなくなっていることは確かである。

今の私は、希望という言葉が発するあの感覚質や、絶望という言葉が内に秘めるあの感覚質とは無縁であるような生活を送っているようなのだ。その他にも例を挙げればきりがなく、今の自分に響かない言葉があるというのは不思議なことである。

現在の自分が置かれている状況や自分の中の変化に応じて、言葉の響き方が全く異なるのである。さらに興味深く思うのは、今の私にとって自分に響く言葉は外側からもたらされるものではなく、内側からもたらされるものになっているということである。

つまり、ある言葉を見聞きしてそれが内側に響くのではなく、自分の内側から現れてきた言葉によって自分自身が響くというような構図が見て取れるのだ。ただし、一つ例外があるとすれば、自分の内側から発せられる言葉と同質のものを持つ言葉を見聞きした時には、やはり自分に響くものがあるのだ。

この三日間、資料を作成することや論文の提案書を作成することにほぼ全ての時間を使っていたように思う。絶えず自分の内側から生まれる言葉と向き合いながら仕事を進めていく中で、上記のようなことにふと気づいたのだ。

休日明けの明日からは、またいつものように文献を読みながら何かを考えるようなことをしたいと思う。とにかくこの三日間は文献と真剣に向き合うよりも、自分の中の言葉を探していく作業に費やされていたのだ。そうした作業の中、自分の言語世界の貧困さを痛感したのは間違いない。

言葉を使って表現できること以上に、言葉を使って表現できないことが無数に存在していることに唖然としたのである。今この瞬間に表現できないことを形にするための言葉は、どのようにすれば獲得できるのだろうか。自分が持ち合わせている既存の言葉を彫琢していくことも大事だと思うが、それだけでは明らかに不十分である。

言葉を驚掴みにするような感性や言葉を噴出させるような感性が、自分の中で開かれていないことに問題があるのでないかと思った。そうした感性の通り道らしきものの姿を時折自分の中に見いだすことができる。あとは、その通り道をより確かなものにしていく手立てを見つけていだけなのだが。

433. 変化と不変

昨夜、就寝前に一冊の本を手にとって読んでいた。それは私が昨年日本にいた時に購入した“Kaleidoscopic mind: An essay in post-Wittgensteinian philosophy (1992)”という哲学書である。これは神保町の古書店を巡っている時に、洋書専門の崇文荘書店で偶然発見したものである。

私はヴァイトゲンシュタインの専門家でもなければ、著者のニコライ・ミルコフの仕事に触れたのも今回が初めてである。しかし、本書の中にある幾つかの章が私の関心を強く引いたのは間違いない。

例えば、「心の動的側面の分析」「写像の創造的性質」「幾何学的な心」「生態科学としての哲学」「哲学的万華鏡」「美的経験」などの章に私は印をつけており、昨日改めてその箇所をチェックしてみると、どうやらすでにそれらの箇所を一読していたようだった。

一読と言ってもそれは単に目を通しただけであり、重要だと思った箇所に線や書き込みが少々あるだけである。こうした専門書に書かれている内容は、確かに価値のあるものであるが、内容そのものというよりも、書物で書かれていることがらが自分の内側にどのように入り込み、そして、どのような作用を自分の内側に起こすかに書物を読む重要性があると思う。

昨年偶然購入したこの書籍は、偶然という言葉では片付けられないほどの意味を持っているように思えて仕方ない。昨夜、この書籍のページを開いたとき、これは今読むべき本であると直感的にわかったし、今後も折を見て読み返す重要な本だとわかったのだ。

書物が持つ不思議さは、読み手の準備が整ったときに目の前に現れたり、逆にこちら側がこれまで気づけなかった重要性をその書籍の中に見出すようなことにあると思う。今回のケースはそのどちらにも該当するだろう。

本書の中に、認識主体と認識対象に関する記述があることを発見した。その記述を読みながら、仮に認識対象が以前と変わらぬものであっても、認識主体の側に変化が起これば、両者の関係性は変化していくということを改めて考えさせられていた。

これはロバート・キーガンの「主体・客体理論」の本質にある考え方と同じであり、それほど目新しいことではないのだが、この本質的な考え方を実際にこの瞬間に経験してみると、そうした考え方は再び目新しいようなものに思えるから不思議である。

なるほど、私という認識主体がこの一年間に少しばかり変化をしており、そうした変化によって、昨年一読したはずの本書から新しい意味を汲み取ることができたのだろう。また、この経験を通じて再度私の認識主体が変化したために、「主体・客体理論」にある本質的な考え方の受け取り方に変化が生じたのだとわかった。

要するに、認識主体である私に変化が生じたことによって、私は同じ内容が書かれた動かぬ書物から違う意味を汲み取り、その書物に対してのみならず、「主体・客体理論」という抽象的な概念に対しても違う意味を汲み取ったのである。

この世界には、変わらずに固着された物や考え方がある一方で、絶えず変化する主体的存在がいることを再度確認する。確かにヘラクレイトスが「万物は流転する」という言葉を残したように、全てものは変化する運命にあるのだろう。また、仏教でいう「諸行無常」という言葉も、この現実世界の事物と現象すべてが常に変化するという考え方を持っている。

仮にこれらの言葉が正しくても、私には認識対象の変化よりも、認識主体の変化の方に重きを置いて着目してしまう傾向がある。というのも、今回の話で言えば、この書物自体の変化—劣化や破損—が自分にとって重要性があるとは思えないし、また「主体・客体理論」にある本質的な考え方というも普遍的かつ不変的な特性を持つものにまで昇華されているような気がしているからだ。

あまり重要性を見出せない書物自体の変化よりも、さらには、変化の余地がほとんど残されていない「主体・客体理論」にある本質よりも、私自身の変化の中により重要なものが含まれていると思うのだ。

窓の外から二人の青年が自転車を漕いでいるのが見えた。二人は横一列になって談笑をしながら自転車を漕いでいる。同じ速度で動いている彼らには、二人の位置が確かに変化していることは気づきにくいのかも知れない。

やはりそうなのだ。二つのものが同時に変化している時には、その変化に気づくことは難しいのだ。しかし、今の私は自分自身の変化に気づいているのだ。こうしたことが起こるのは、何か固定的なものがあり、それを参照点として私という認識主体が変化しているからなのではないだろうか。

そうであるならば、この世界には変化するものと変化しないものがありそうだ。少なくとも、変化の速度が違うものがこの世界には混在しているように思えるのである。

434. 啓蒙書

昨日計画していた通り、今日は書籍を十分に読む時間があった。時間があったと言うよりも、自発的に時間を作ったわけだが、三日間書籍から離れていたためか、書籍の内容が自分の芯に染み入るようだった。

私は昔から、書籍の内容に長く集中することができず、書籍の内容を頭に入れながら読んでいるというよりもむしろ、書籍に記載されている一つの内容からあれこれと何かを空想しているようなことが多い。そのため、これまでの人生を通じて、隅から隅まで読んだ本というのはあまり存在していないのかもしれない。

それぐらい、書籍を読むことによって様々な考えが自分の中に湧き上がり、既存の考えと結びつく形で思考が拡散していく傾向にあるのだ。こうした思考の拡散を収束させるために、私は文章を書いているのかもしれない。逆に、将来の思考の拡散をさらに促すように、今文章を書いているのかもしれない。

この数ヶ月は毎日何かしらの文章を書いているが、仮に文章を書かない日があれば、それは自分の思考が拡散しなかった証拠であり、思考が拡散しなかったということは、自分の思考に対して何らの刺激がなかったことを意味するように思う。

自分にとって書物を読むというのは、もしかしたら思考の拡散をもたらす働きが多分にあると思わされ、文章を書くというのは拡散した思考を凝縮させるような働きがあるのではないか、ということに気づいた。正直なところ、あまり研究に関係のない書籍ばかり読んでいても仕方ないのかもしれないが、来学期までは論文を読むよりも、手持ちの専門書を読むことに比重を置きたいという思いがある。

そうした思いから、今日も昨日に引き続き、ニコライ・ミルコフの“Kaleidoscopic mind: An essay in post-Wittgensteinian philosophy (1992)”を読んでいた。やはりこの本は、私に多くの気づきをもたらしてくれる優れた哲学書である。

本書を一通り読み終えた後、午後からはカート・レヴィンの“Field theory in social science (2013)”に取り掛かっていた。本書は上記のミルコフの書籍と違い、過去に一度すべての内容に目を通していった。本書の内容も現在進めている研究に対して直接的な関係はなく、論文の中で本書を引用することもないと思うのだが、熱の冷めないトピックが幾つかあるので、その辺りを中心に再読したいと思ったのだ。

具体的には、「場理論の構成概念」「場理論と学習」「停滞・退行・発達」「心理学的生態学」「グループダイナミクスの最前線」が自分の関心と合致する項目である。項目を書き出してみると、自分が何に関心を持っているのかが明瞭になり、それらの項目を関連付けることによって、また新しい関心事項が生まれてくるような気がしている。

今回文章として書き留めておこうと思ったのは、ミルコフの書籍を読んで湧き上がって来た考えについてである。一つは、優れた哲学書であればあるほど、そこには質的に高度な構築物が構築されており、言葉の凝縮性を体感することができるというものである。

ある哲学書に対して言葉の凝縮性を体感することができるというのは、往々にして、その書籍で構築されている建築物に自分が圧倒されている場合が多い。これは内容に関する理解も含め、そもそも著者の言葉の力に対して自分の力が及んでいないことに起因する場合が多いだろう。

こうした本こそ、自分を高めていく契機を生み出してくれるものだと思うのだ。数年前のように、手当たり次第に様々な書籍を読むことを止め、こうした書籍とじっくりと向き合っていくと決めてから、自分の内側ではやはり様々な変化が起こったように思う。

こうした書籍は読むのに時間がかかり、なおかつ全体として理解できる箇所は大抵数ページか数十ページぐらいである。しかしながら、こうした本こそが自分を真の意味で啓蒙してくれるものなのだと思う。

435. 研究プロセスにおけるホロン階層について

先日のクネン先生とのミーティングで一つ課題として提出された「理論モデルの創出」について少しばかり考えていた。本来であれば、研究テーマに関する理論モデルを構築することがクネン先生の意図だと思うが、理論モデルを構築することそのものについて少し考えていたのである。

私の研究では応用数学のダイナミックシステムアプローチを活用することを計画しており、「応用数学」という言葉にあるように、確かに研究プロセスの中で数式モデルを構築する必要がある。こうした数式化の前提には、定量的なデータが必要であることは間違いない。

そして得てして、数式化とは「定量化」と同義だという認識があるだろう。しかしながら、数式化の中には、紛れもなく定量化の要素はあるが、それだけではないことに気づいた。クネン先生がなぜあれほどまでに、数式モデルを打ち立てるよりも先に理論モデルを構築することが先決だ、と述べていたのかが少しわかったような気がする。

というのも、特に社会科学の領域では、現象を数式化するためには、定量化よりも先に定性化のプロセスが先になければならないからである。要するに、数式を立てる目的や何を数式として表現したいのかを先に明らかにしなければ、数式など立てようがないのである。

そういえば、シンボルに関する研究で優れた功績を残したエルンスト・カッシーラーも再三にわたって、数式化は定量化と同一ではない、ということを述べていたことを思い出した。やはり数式化の大前提には、どのような現象に着目して、何のためにどのような数式を立てるのか、という定性化のプロセスが存在しているのである。

ある意味、私の研究プロセスにおいて、理論モデルを検証するために数式化が必要であるため、定量化よりも定性化の方が重要性が高いように思う。階層構造で言えば、定性化が研究の土台にあり、この土台がなければ、定量化という次の階層は消滅してしまうだろう。

これはアメリカの思想家ケン・ウィルバーが指摘している「リアリティはホロン階層で構築されており、下位ホロンが消滅すると上位ホロンも消滅する」という言明を裏付けるようなものだと思う。本当に研究プロセスという現象もホロン階層で成り立っているのだと思わされた。

ここで興味深いのは、定性化の方が下位ホロンに該当し、定量化の方が上位ホロンに該当しており、私は下位ホロンの方に重要性を見出しているということである。「発達は善である」という思想を盲目的に信奉している場合、上位階層に置かれたものの方が重要だ—あるいは「価値がある」—という認識が生まれやすい。

しかしながら、下位ホロンが消滅すると上位ホロンが自動的に消滅してしまうというリアリティの特性が掴めていれば、上位階層に置かれたものの方が重要である(価値がある)と安易に述べることはできないだろう。

あえて述べると、今回の私の研究においては、下位ホロンに該当する定性化の方が重要かつ価値のあることだと思っている。その理由の一つには、自分の理論モデルが構築されなければ、そもそも数式化などできるはずもなく、研究が進まないからである。

もう一つは、自分独自の理論モデルを構築することが研究領域に対する貢献だと考えており、自分なりの理論モデルを構築することの中にこそ独自の価値が宿っているからである。クネン教授から与えられたお題とはだいぶかけ離れてしまったが、自分の考えを少しばかり整理することができたので、これからは理論モデルの原型を幾つか考えることに力を注ぎたい。

436. 有意味と無意味を超えて

昨夜の力強い夢に影響を受けながら、今朝はみなぎる気力に充滿する形で起床した。寝室に時間を確認できるものを一切置かなくなってから、起床がとてもスムーズなものになった。起床した時に、時間を確認できるものがそばに置かれていると、起床時間があまりに早いと再び眠りについてしまうことがある。

基本的に睡眠は食べることと同様に、必要な分だけ取ればいいと思うので、無理に決まった時間の長さを睡眠に充てる必要はないだろう。今朝は四時に起床した。そこから一日の仕事をスタートさせた。昨夜から少し気づいていたのだが、自宅の湿度がかなり下がっており、寝室が乾燥していた。

フローニンゲンの街は秋というよりも、もはや冬の始まりを告げているようだ。自分の内側で起こっていることも外側で起こっていることも、全てがめくるめく変化していることに気づかされる。ただし、そうした目がくらむような無数の変化の最中でも、私自身は至って淡々としているように思う。

この世界を静かな目で眺めた時、それは万華鏡を回すかのように、目に映る光景が様々な側面を見せるのは確かである。万華鏡の中に現れる世界の意味や様相は絶えず異なったものとして捉えられるのだ。万華鏡を動かすことによって、現象世界の意味や様相が変化するのはごく当たり前のことなのかもしれない。

もし当たり前でないことがあるとすれば、万華鏡を動かすという変化を要因とせず、私の現象世界の意味や光景そのものが自発的に変化していることだろうか。プラトンが魂の特徴として述べた「それ自体の中にある運動」が、私の万華鏡の中の世界にも当てはまっているように思うのだ。

一個人の意味世界の深まるプロセスはつくづく面白いものだと思う。意味付けをする主体とその主体がすでに生み出した意味の残存物がともに変化していくのである。これまで私は、意味付けをする主体のみが変化していくのだと考えていた。

しかしよくよく観察してみると、自分がこれまで生み出した意味そのものが独自の展開法則に則って発展していく可能性を見ている。文章が書き手の意図を超えて自ずから流れていくかのように。過去に生み出した意味そのものが、こちらの意図を超えて自発的に発展していくという可能性を今しばらく保持しておこうと思う。

ここからまた奇妙な出来事に遭遇した。昨夜、夢の世界に参入する前に、夢を見ないあの深い眠りの世界の中では、意味付けをする主体も意味と呼ばれるものも、それら全てが完全に滅却していることに思いを巡らせていた。

禅仏教の観点から言えば、これは端的に私の自覚的自己の鍛錬不足なのだろう。本当に目醒めた者は、深い眠りの中でも自覚的な自己を保っていることができると言われている。この境地は、今の私には想像の範疇を超えたものである。

全てを無に帰すあの深い眠りの中において、意味付けをする主体が存在できるのであれば、私たちの主体は本質的に無なのかもしれないと思わされる。そして、主体から生み出された意味は、生み出された瞬間に有意味になるのだが、これも深い眠りの世界の中で存在できるのであれば本質的に無意味なのかもしれない。

そう考えると、有意味と無意味の交差する世界の中を私たちは生きているのかもしれない、と思わされる。私は有意味と無意味が統一された超越的世界で生きる道を探りたいと思う。2016/10/11

437. 熱感

四時に起床後、早朝からある程度の仕事を済ませ、九時から始まるオランダ語のクラスへ向けて家を出発した。キリッとした寒さが広がるフローニンゲンの街に一步繰り出してみると、十月の第二週目にもかかわらず、もうマフラーが必要だと感じた。

確かに、すでに道行く人の中にはマフラーを巻いている人もいる。こうした寒さにあっても、私の内側に広がっている熱感は一向に冷める気配がない。外の世界の気温が下がれば下がるほど、私の内側の世界の気温は上昇していくかのようなのである。

こうした冷めやまぬ内側の熱い感覚に目を向けてみると、それを“passion”や“enthusiasm”という言葉で捉えることに対して、相当に違和感が生まれてくるようになった。実際に、私はそれらの言葉をもはや口にできなくなってしまうのだ。

そうした言葉は自分の内側で湧き上がる熱い感覚を正確に言い表しておらず、それらの言葉を用いることは非常に不誠実だと思うようになった。以前どこかで言及したように、自分の内側の熱感を言い表すのであれば“zest”という語彙がふさわしいように思う。

ここで二つの興味深いことに気づく。一つ目は、以前の私であれば、“passion”や“enthusiasm”という言葉を用いて内側の熱感を表現していたことである。実際には、昨年東京にいた途中まではそれらの言葉に何も違和感を覚えなかったのである。

ある時をきっかけに、それらの言葉には収まりきらないような熱感が自分の中から湧き上がっていることに気づき、哲学者のアルフレッド・ノース・ホワイトヘッドの哲学書を読んでいる時に“zest”という言葉に偶然出会ったのだ。内側の感覚質が変容を迎えると、これまでは何も違和感を感じなかった言葉が突然として活用できなくなることは、とても興味深いことではないだろうか。

二つ目は、前者の二つの言葉はともに「情熱」であり、後者は「熱情」という日本語訳を当てることができると思うが、文字が入れ替わっただけなのに、なぜこれほどまでに二つの語彙が発する色・匂い・音感を含めた力強さが異なるのだろうか、ということである。実際に試しに二つの言葉を声に出

していただきたい。声に出してみると、二つの言葉が持つ言霊は歴然とした違いを持っていることがわかるのではないだろうか。

言葉に宿るこうした霊力は、脳科学的にも心理学的にも研究しがたいのあるテーマのような気がしているが、それら二つの科学領域からアプローチをするだけではもちろん物足りない。普段私は、心理学を含めた科学的な世界に足を置きながら科学者としての仕事を進めているが、常に私を惹きつけてやまないのは、超越的な哲学や形而上学などだ。

内側に湧き上がっている熱感に関する二つの興味深い事柄を再び振り返ってみると、そこからさらに新しい発見事項に辿り着いた。二つの点を総合してみると、いつか「熱情」という言葉すらも使えなくなる日が来るということに気づいたのだ。

数ヶ月前にすでにその予兆を察知しており、「熱情の果て」について思いを巡らせていたことが記憶に新しい。一人の人間の感情が質的にも量的にも大きな変容を遂げるというのは、私にとっては驚異的な事実に見える。

今のわたしにとって「熱情」という言葉は、ほぼ正確に今の自分の熱感を言い表していると思うのだが、極々僅かばかりの違和感があるのも確かである。この違和感を無視することもなく、払拭しようとすることもなく、ただただ違和感を違和感として温め続けたその先に、臨界点を超える日がやってくるのだと思う。

それはちょうど、今日のフローニンゲンの街が秋という季節の臨界点を突如として突破し、冬に移行したのと同じように、熱情の臨界点を超えた先には、次なる言葉が自分を待っているのだろう。我慢に我慢を重ね、自分を抑えに抑え続けて生きてきた日々も終わりに差し掛かっていることがわかる。

情熱的な生というサイクルが終焉を迎えるまでに30年の月日が必要だった。そして、新たに始まった情熱的な生というサイクルが終焉を迎え、未知なるサイクルが再びやって来る日がいつになるのかは見当もつかない。しかし、その日は必ずやって来るのだ。冬の次には春が必ずやって来るように。2016/10/11

438. 多様な文化から

以前紹介したように、現在私が履修しているオランダ語のコースには様々な国からやってきた受講生が集っており、各国の情報を教えてもらえる良い機会になっている。昨日のクラスで隣に座っていたイタリア人のファブリツィオと、先週末に出されたライティングの課題について話をしていた。

この課題は、自国の食べ物を説明するというものである。寿司を取り上げるのはありきたりだと思ったため、私はお節料理を取り上げることにした。ファブリツィオに聞いてみると、彼はカルボナーラパスタを題材にしたらしい。以前から気になっていたことをいくつかファブリツィオに聞いてみた。

私:「ファブリツィオは何を題材にしたの？ やっぱりピザ？」

ファブリツィオ:「いや、カルボナーラパスタにしたよ。」

私:「そういえばイタリア人は週に何回ぐらいパスタを食べてるの？」

ファブリツィオ:「僕は週に四回ぐらいかな。ピザは週に一回ぐらい。こっちに来てからピザは全然食べてないけど、パスタはやっぱり週に四回は食べてるね(笑)」

私:「日本人にとっての米みたいだね(笑)」

ファブリツィオ:「そうかもね。それで思い出したけど、ミランでは日本食レストランが多くなってきていて、イタリア人にとって日本食レストランはなぜだかカッコイイものに響いてるんだよね。」

私:「へえ～、それは面白い。日本では逆に、「イタリアン」と聞くとカッコイイものに響いてるんだよね。」

極めてたわいもない話であるが、ファブリツィオとの対話によって、イタリア人にとってのパスタの位置付けがわかったし、日本食レストランに対してイタリア人が憧れのような感情を抱いていることもわかった。日本人が「イタリアンレストラン」や「フレンチレストラン」という言葉に抱く心象イメージと同じようなものを、イタリア人は「ジャパニーズレストラン」に対して持っているようなのだ。

しかし、ファブリツィオが話をしている時の表情から察するに、どうも両者の心象イメージの根源は異なるように感じた。具体的には、日本人が「イタリアン」や「フレンチ」と聞くとときに湧き上がる感情の根底には、やはり西ヨーロッパに対する「西欧コンプレックス」のようなものが横たわっている気がしてならない。

この種のコンプレックスは人口に膾炙している現象であるが、もはやそんなことはないと思っ
ても、自分の行動や意思決定の中に、この種のコンプレックスがもたらす影響を見て取れることが多々あるのではないだろうか。

一度根付いたこうした集合的なコンプレックスを払拭するのは非常に困難であり、ほとんどの人たちが今も無意識下でこのコンプレックスに縛られているように思う。一方、ファブリツィオの話し方や表情などから推察すると、そこには日本に対するコンプレックスのようなものはほぼ皆無であり、やはり「憧れ」という感情の出所は両者でまるっきり異なっているように感じたのだ。

その後、アテネ出身のギリシャ人のアンタと別のエクササイズを一緒に行っていた。私が参加しているクラスにはイリアーナというもう一人のギリシャ人がいるのだが、アンタにせよイリアーナにせよ極めて社交的な性格をしている。

アンタ:「ヨウヘイは香港出身よね?この間、別のクラスで香港出身の人がいて、彼の顔の形を見てヨウヘイを思い出したわ(笑)」

私:「いや、僕は香港出身じゃなくて日本出身だよ・・・(笑)」

アンタ:「あっ、そうだったけ?(笑)いずれにせよ、顔の形が珍しいから印象的だったの。」

ギリシャから来たアンタにしてみれば、日本人と香港人の顔は同じものに映るのだろう。これもまた面白いことである。私はたいていの場合、中国人や韓国人と日本人の区別が付くが、やはり西洋人に見れば東洋人の顔の区別は難しいようなのだ。

逆に、東洋人にしてみれば西洋人の顔の区別は難しい。どの国に生まれたかによって、微細な差異を認識できる力が発揮される領域が異なるのだ、ということに改めて気付かされた。その後の会話で、アンタから夏のギリシャを勧められた。

これまでギリシャは私にとっては遠い存在だったのだが、最近少しずつその距離が縮まってきていることを実感している。実際に、来年の夏はギリシャを訪れようと思っていたので、アンタからの一声によって、ギリシャが一步また私に近づいてきたように思えた。

クラスの帰り道、先週と全く同じ場所でファブリツィオと中国人のシェンが立ち話をしているのを発見した。私はすかさず彼らに近寄り、二人の肩を叩いた。二言三言の会話を交わした後、ファブリツィオは中央図書館の方向に消えていった。シェンと私は共に同じ方向に向かって歩きながら、言語と文化の話をしていた。

シェンから中国語の変遷に関する話を聞いてみると、何やら1940年代の終わりに、中国語を簡素化する動きが始まったそうだ。簡素化というのは、漢字の一部を崩すような表記に変わったことを意味するらしく、実際に幾つか例を見せてくれた。確かに、漢字の一部が崩されたように簡素化されていて面白かった。この機会に、その他に気になっていることをシェンに聞いてみた。

私:「そういえば、中国人は漢字を忘れることや書けない漢字はないの？自分はどんどん漢字を忘れていくことや書けない漢字が多いことに愕然とすることがあるんだけど(笑)」

シェン:「う～ん、基本的に忘れることはないね。書けない漢字もほとんどないと思う。」

私:「じゃあ、今シェンが手に持っている日本語のテキストに描かれている「バーベキュー」という漢字は簡単に書けるの？」

シェン:「うん、もちろん書けるよ「烧烤」だよ。あつ、ちなみに簡素化される前の場合だと「燒烤」だね。」

私:「すごいね！じゃあ、果物の「レモン」は？日本人でこの漢字を書ける人はほとんどいないんだけど。」

シェン:「はは、「檸檬」だね。簡素化前は「檸檬」。」

日本人の私からしてみると、このように難解な漢字をいとも簡単に書けてしまうことは驚きなのだが、よくよく考えてみると、中国人にとっては、『バーベキュー』や『レモン』をカタカナで書いてください」と日本人に質問するぐらいのレベルなのだろうとわかった。いずれにせよ、今日のクラスを通じて、改めて文化的な差異に強い関心を持つようになったのは確かである。

439. カート・レヴィンの理論より

発達心理学者のハインツ・ワーナーが指摘しているように、学習や発達の本質には「差異化」という現象がある。これは生物の進化のように、現在の特性がどんどん分化されていく形で私たちの学習や発達が進むことを示している。

先日、組織に関する研究で多大な功績を残した心理学者のカート・レヴィンの“Field theory in social science (2013)”という書籍を読んでいた。ここにはレヴィンの選り抜かれた論文が収められている。その中でも1942年に執筆された“Field Theory and Learning”には、非常に洞察の溢れる指摘がいくつも掲載されている。

レヴィンの指摘で特に興味深かったのは、単なる反復学習は差異化の過程を妨害し、逆に同質化（あるいは固定化）を促進してしまうというものである。この考え方は、以前紹介した「非線形教授法」にもつながってくるものだと思う。

非線形教授法では、単なる繰り返しをできるだけ避けながら、現実の環境に即した形で変化に富む実践を学習者に行わせることに鍵がある。こうした発想の元には、ダイナミックシステム理論のように、学習や発達を動的なものとみなす考え方がある。

非線形教授法が比較的近年に生み出されたものであることを考えると、今から70年以上も前に、学習や発達の動的な側面に着目していたレヴィンの先見の明に驚かされる。また、レヴィンの論文を丹念に読んでみると、彼が発達における停滞や退行現象を緻密に探究していたこともわかる。

言い換えると、レヴィンは発達現象には停滞や退行が不可避であるということを、実証研究によって半世紀以上も前に明らかにしていたのである。構造的発達心理学の領域では、発達過程で不可避に生じる停滞や退行現象が認められるようになったのは、比較的最近のことである。

おそらく、カート・フィッシャーを代表とする新ピアジェ派たちによってこうした現象が指摘されるようになったのは、この20年以内のことだろう。もちろん、発達において退行現象が見られると指摘したのは古くはフロイトだが、フロイトは退行現象を幼児期への単なる逆行であるとして否定的に捉えていた。

一方、フロイトの弟子のユングは、退行現象を力強いエネルギーをもたらす創造的なプロセスであると捉えていた。つまり、フロイトは退行現象を否定的に捉えていたのに対し、ユングは退行現象を肯定的に捉え、固有の価値を見出していたことがうかがえる。

いずれにせよ、構造的発達心理学の観点から停滞や退行現象が受け入れられるようになったのは、近年においてであることに変わりはない。そうした背景を考えると、発達プロセスにおいて停滞や退行は例外的な現象ではなく、所与の現象であると指摘したレヴィンの功績は大きいだろう。

そこからさらに、近年では「レジリエンス(精神的弾力性)」という言葉が提唱されており、停滞や退行に対する柔軟性が強調される時代になっている。停滞や退行がいかに不可避のものであるとはいえ、永続的に停滞や退行をしていては、発達が起こらないのも事実である。

また、レジリエンスという概念が、「発達に不可欠な変動性を適度に維持する力」という意味を持っているのであれば、それは発達を支える重要な要素だろう。人間や組織の発達について考える際に、レヴィンの場理論はその他にも非常に重要な考え方を含んでおり、今後も少しずつ彼の理論を参考にしながら発達現象に迫っていきたいと思う。

440. 超越的文脈把握力

今日のオランダ語のクラスでは、不可思議な言語感覚に包まれていた。端的に述べると、言語の文脈把握能力が極めて鋭敏な状態になっており、教師のリセットが話すオランダ語の細部がわからなくても、なぜだか全体の意味がすっと頭に入ってくるような感覚があったのだ。

自己認識としてこれまで持っていたのは、私は日本語でも英語でも、相手の話していることの全体感を捉えるのがあまり得意ではない、ということである。比較的短い言葉のやり取りがなされる場合は、日本語でも英語でも相手の話し言葉を理解できるのだが、文章が長くなると、一文一文の形に囚われてしまい、それを組み合わせた時の全体としての意味がわからなくなることが頻繁にある。

言語を司る知性や能力と一括りに言っても、話し言葉と書き言葉では活性化される脳の部位や意識の領域は、随分と異なるのではないかと思われる。とにかく、これまでの私は、話し言葉の全体感を捉えることを不得手としていたが、今日体感していたのはまさに、話し言葉の全体像を丸ごと抱きかかえるような感覚だったのだ。

あたかもそれは、自己が言語の文脈と同一化しているかのような状態であったと言ってもいいだろう。要するに、意識的に文脈を外側から把握しようとするのではなく、自己が文脈の内側に入ることによって、文脈に自分を委ねたまま相手の話し言葉の全体像を捉えていくような状態にあったのだ。

日本にいた時には、日本語を外側から日本語として絶えず捉えようとするような自己が存在していたし、米国にいた時には、英語を外側から英語として捉えようとするような自己が存在していたように思う。そこには言語に対する過剰な警戒心と緊張が横わっていたような気がするのだ。

不思議なことに、オランダで生活を始めてから徐々にこうした過剰な警戒心と緊張から解放され、言葉の内側に入り込むことができるようになってきていると実感する。言葉を言葉として外側から捉える必要がなくなってきたことは、自分にとってはかなり大きなことである。

私たちは日々多様な文脈に組み込まれながら生活を営んでいる。しかし、どうもこれまでの私は、ある特定の文脈の中に真に入り込むことを避け、常に文脈そのものを外側から眺めるようにしていたことに気づかされたのだ。

ここでもアメリカの思想家ケン・ウィルバーが提唱した「前・超の虚偽」という古典的な概念が重要である。つまり、文脈に盲目的に没入することと文脈に自覚的に参入することは大きく異なるのである。

この概念を用いれば、これまでの私は文脈に盲目的に没入することを避け、絶えず文脈を外側から認識しようとしていたため、文脈把握の三段構造の中間に位置していたのだと思う。長きにわたって文脈を客体化し続けた結果、思わぬ形で次の構造に到達したのが、今日のオランダ語の第十回目のクラスだったのだ。

文脈を真に俯瞰的(超越的)に捉えるというのは、文脈を単に客体化するのではなく、客体化の極地に待っている文脈への自然的な参入だったのだ。今日のクラスは終始、こうした超越的文脈把握力の恩恵を授かっていたように思う。

文章の出だしが生まれる前に書こうとしていた内容は、本日のクラスで習ったオランダ語の助動詞についてだったのだが、いつの間にやらそのテーマは極めて些細なものに成り果てており、結局一言も触れることができなかった。